

GEORGE

ジョージ・カックルと、

COCKLE

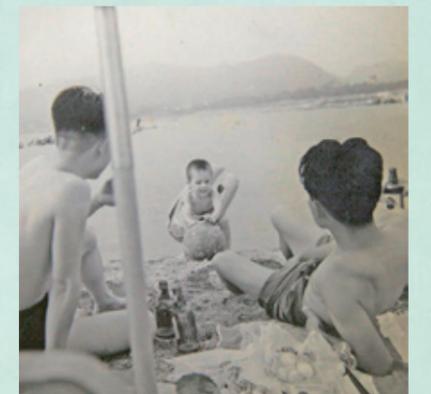
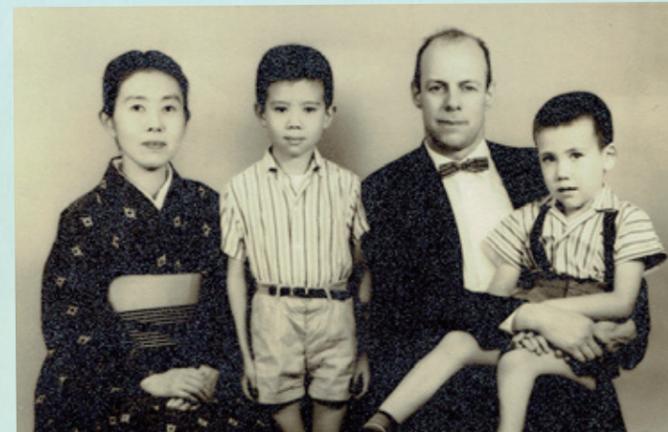
海と、鎌倉と。

INTERVIEW

鎌倉で生まれ、世界をぐるりと一周し、18年間のサンフランシスコ暮らしを経て再び鎌倉へと戻ってきたジョージ・カックルさん。アメリカ国籍でありながら鎌倉を選び、そこに定住する理由とは？それほどまでに彼を惹きつけてやまない鎌倉の魅力とは？ジョージさんの視点を通して、改めて鎌倉という土地を見つめ直してみたい。



ジョージ・カックル ● 1956年鎌倉生まれ。日本人で日本舞踊の師匠の母と、アメリカ人でヨッドマンの父を持ち、幼少時代を日本・テキサス・韓国で過ごす。小学3年生でビートルズに開眼。その後、LAで有名なサーフポイントでの初サーフィン体験。この原体験が、その後の人生を決定付ける。日本での学生生活の後、憧れのインドをはじめ世界を放浪し、ハワイ経由で波が豊富なサンフランシスコに移り住み18年間波乗り明け暮れる日々を送る。古今東西の音楽と文化と人間臭さをこよなく愛し、日本と世界を結ぶ架け橋になりたいと願い、今日もポップ・マリーを聞きながら波を探している……。 <http://georgecockle.com/>



GEORGE COCKLE INTERVIEW

居心地のいい鎌倉から、世界へ

真冬にもかかわらず半袖アロハシャツで登場したのは、鎌倉生まれの陽気なサーファー、ジョージ・カックルさん。インタビュー「ジョージ・カックルレイジーサンデー」のパーソナリティとして有名だが、その顔はひとつではない。音楽プロデューサーや鎌倉ケーブルテレビのキャスター、最近では絵本『ビーチグラス』やエッセイ集『100のジョージ・カックル』の執筆も手掛けるなど、活躍の場は実に多彩。人生そのものもワールドワイドな彩りに満ちていて、幼少期を鎌倉、テキサス、韓国で過ごしたのち、インドを起点に7ヶ月の世界一周旅行に出たり、ハワイ経由でサンフランシスコに移り住んだりとフットワーク軽く世界中を飛び回り、仕事もロックバーの店員から石積みやペディキャブ（自転車付き人力車）のアルバイト、牧場のカウボーイに古着屋の店長、車のメカニック、海水温度の研究まで、幅広い経験を積んできた。そして今、再び戻ってきたのが原点の地、鎌倉。アメリカ国籍でありながら鎌倉をこよなく愛し、そこに住み続ける理由とは――？ ジョージさんを通じて見えてくる鎌倉の魅力を知るためには、まずジョージさんのマイノリティな人生をたどる必要がある。

「うちの父はアメリカの軍人、母は

日本舞踊の名取だった。ある日、父が母の踊りを見に来たのがきっかけで出会ったんだ。それでおばあちゃんが父のことを気に入って、結婚しなさいって言ったみたい。戦争で勝った国のこの人は、男の中の男なんだから、って。うちはおばあちゃんが法律だったから、それで結婚することになったんだ。当時おばあちゃんは荻窪に住んでいたんだけど、外国人と一緒に住むなら鎌倉に行きましよう、ってことになって移り住んだみたい。鎌倉は昔から、そういうことが許される場所だったから。おかげで僕らは合いの子って言われることなく育つことができたんだ。アメリカンスクールで出会った他の地域の友達はいじめられてたみたいだけど、鎌倉はそういうことがなかったから居心地がよかった。当時の日本にはまだ、僕らみたいなハーフが居心地よく暮らせる場所は少なかったんだよ。

その後、テキサスに移住し、7年生（日本の中学1年生）の夏休み明けから韓国へ移り住むことになった。ところが、韓国で住む予定のマンションがなかなか完成せず、途中で立ち寄ったロサンゼルス父の友人宅で3ヶ月間居候することに。そのときに出会ったのがサーフィンだった。「3ヶ月も暇だと、中学生は悪いことするじゃん（笑）。だから親父がサーフキャンプに行けって言って、キ



「二十歳の頃、バイトして貯めた16万円で
7ヶ月間かけて世界一周したんだ」

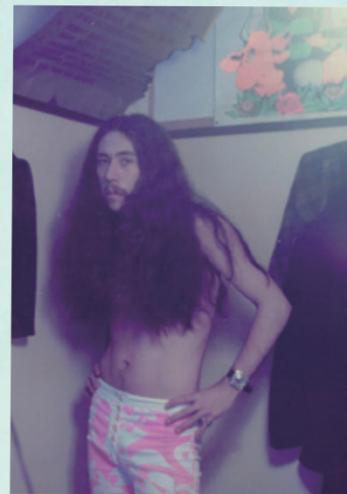
キャンプに入れられたんだ。キャンプって言っても、毎朝高校の先生が10人くらいの子どもを迎えに来て、板を積んだバンを運転して海に行って、夕方帰ってくるだけなんだけどね(笑)。先生がサーフィンしたいところに連れて行くから、リンコンヤらマリブやら、有名どころのポイントは全部入ったよ。朝早いから水が冷たかったけど、誰もウエットなんか着てなかったね。それがサーフィンとの出会い。68年か、69年頃かな。それでサーファーになった気分で行ったんだけど、韓国のインチョンに行ったら波もボードもなくてさ。唯一、ハングテンのTシャツだけは着てたけどね(笑)。

2年間の韓国滞在を経て再び日本に戻ると、鎌倉のサーフショップでさっそく板を買って海通いが始まる。「当時は長谷に住んでたから、ウエット着て、板持って、江ノ電乗って、七里方浜とか稲村に行ってた。そうすると、帰りに俺が立ってるところだけびしょびしょになっちゃって(笑)。でも、昔は電車の床が木だったから浸み込んで危なくなかったんだけどね。当時は駅員のおじさんが切符を切ってたから、ツケで乗れたのね。行くときに2回分払って、帰りはバスで。そうやって江ノ電で通ってたのが、高校生の頃のサーフィンの思い出だね。サーフィンが好きだったけど、そのときはそれほどガ

ンガンやってなかった。でも、今でも覚えてる波はあるよ。夕方、鎌倉をぶらぶらしてたら急に波が上がってきて、パーフェクトなレギュラーを5人貸し切りで乗れて。あの完璧な波は、今でも忘れられないね」。

高校を卒業すると、一旦サーフィンからは離れることになる。新宿2丁目のロックバー「開拓地」で働き始め、音楽の世界にのめり込むことになるからだ。

「夜12時から朝6時までバーで働いて、朝8時から大学行って……という生活だったけど、そんなに勉強なんかできるわけじゃないね(笑)。髪長くてヘビ革のロンドンブーツなんか履いてるし、先生にも怪しまれた(笑)。結局、大学は1年間行ってやめちゃって、インドに行くことにした。働いてたバーがヒッピーの溜まり場で、インドの話をよく聞いててかっこいいなと思ってたし、アメリカンスクール時代の友達がインドに引越したから遊びにこい、って手紙をくれたのもあったから。それで、バーをやめて3ヶ月くらい石積みみのバイトをして、体を鍛えつつお金を貯めて、貯まった16万円を持ってインドに行ったんだ。そこで3ヶ月過ごして、パキスタン、アフガニスタン、イラン、トルコ、ギリシャ、イタリアとか世界中を回って……。それから日本に一度戻ってきて、またインドに行って、今度はハワイ経



GEORGE COCKLE INTERVIEW

「当時の日本のサーファーはアメリカのファッションに憧れてたけど、ジーンとTシャツは俺たちにとって昔からの普段着だったから、それが何？ って気にも留めなかったんだよね。カリフォルニアでは古着屋の店長をやったこともあったけど、日本でジーンやTシャツやネルシャツが流行るなんて思ってもいなかった。その頃はレコードのことしか頭になくて、中古レコードはいっぱい集めてただけだね。日本のファッションの流行をもうちょっと考えていたら、今頃は違う職業で成功してたかもしれないのね(笑)。もともと俺はサーフィンやサーファー

だ。置いてあるのはボードとウェット、ワックス、フィン、パワーコードだけ。ボードは11フィートのガンが普通に置いてあったけど。洋服なんかは、ボードやウェットメーカーが出してるものしかなかったね。そんなものすごい場所でサーフィンしてたから、当時は俺も逆三角形の体型だったんだよ(笑)。

日本を歩き来しつ、70〜80年代をサンフランシスコで過ごしたジョージさん。70〜80年代といえば、日本でもサーフィンが盛んになり始めた頃。日本のサーファーがカリフォルニアスタイルのファッションに憧れた時代でもあったが、ジョージさんの目に当時のブームはどう映ったのだろうか。

「サンフランシスコって平均でダブルくらい波があって、すごくハードな場所なんだ。流れも強烈で、ずっとパドルしてないとすぐに流されちゃう。隣のポイントで入ってたヤツが流されてくるのも当たり前だったから、ローカリズムなんてせいこい考えはなかったね。ルールはただ一つ、人の波に乗らない、っていうシンプルなものだけ。当時はサーフィソップも軒しなくて、チャラチャラしたグッズは何も売ってなかった。

「それからは、日本にもたびたび足を運びつつ、サンフランシスコを拠点に本気でサーフィンに取り組み日々が始まる。カレントが強烈なことで知られるオーシャンビーチやフォードポイントなどに週5日間も通っていたという。」

「由でアメリカに行ったんだ」。

アメリカでは大学に入り、3年間かけて車のメカニックについて学んだ。理由は、自分の車のメンテナンスをしてくれたメカニックのおじさんの優しさに惚れたからだという。自分の直感に正直で、思い立ったら即行動するジョージさんらしいエピソードだ。その後、熱心に勉強して大学を優秀な成績で卒業し、念願のメカニックとして働き始めたにもかかわらず、油がこびりついた指で大好物のスシを食べるのが嫌だという理由で仕事をやめてしまったのもまた、ジョージさんらしい。

GEORGE COCKLE INTERVIEW

に憧れて波乗りを始めたわけじゃないし、日本ではカリフォルニアのサーファーはカッコいいものとして扱われてきたけど、実際の向こうのサーファーはバカやってぶざけるようなヤツらばかりだったよ。ファッションだって、寒いからフード付きのパーカーを着るとか実用性重視だったし。日本でのサーフィンもファッションとしてカッコいいものにしたのは、80年代に東京から来た丘サーファーたちだよ。70年代はサーフィンにカッコよさなんてなかったから。波乗りやってるのは海の近所に住んでる子どもか、怖いおじさんくらいだったんだから(笑)。完全に体育会系の世界で、俺もよくバシリをさせられてたよ(笑)。

定住の地に鎌倉を選んだ理由

サンフランシスコのハードな波とサーフカルチャーに18年間どっぷり浸かった後、再び日本に戻ってきたジョージさん。今は鎌倉に住み、ホームポイントである大崎の目の前に事務所を構え、波と時間が合えばサーフィンを楽しむ日々を送っている。「俺の好きなジミー・バフェットっていうアーティストが、家から自転車で15分、自分の好きな波の前に事務所があるって知って、それを真似したの(笑)。俺は鎌倉に住んで、大崎がちょうど自転車15分なんだよね。でも実は、今年に入って

から一度も波乗りできてないんだよ。万が一のことがあったら周りに迷惑かけちゃうから、仕事があるときは海に入らないようにしてるんだけど、そしたらなかなか暇がなくて。けど最近、人が波乗りしているのを見てるだけでも満足感を得られるんだよ。昔、タイガー・エスベリが大崎に住んだ頃、コーヒー飲みながら人のサーフィンを見てるだけってことがあったんだ。俺が「入らないの?」って聞いても、「いや、いいんだ」って言って入らなかったんだよね。当時の俺は、この人サーファーじゃねえなとか思ってたんだけど、今はその気持ちがよくわかる。それに今は、海に入ってもただボードに乗ってシュート滑るだけでいい、って思える。せつかく乗った波なのに、技やろうとして落ちたらもったいないじゃん(笑)。サーフィンのフィロソフィーって、それでいいんじゃないかな。これはいつも話すことなんだけど、俺が思う一番ビューアなサーファーっていうのは、サーフィンのこと知らないでハワイかどっか行って、レンタルボード借りてシュート滑って二度とやらない人。だんだん技やファッションやボードにこだわり出すと、もうそれはビューアじゃないんだよね。サーフィンは、シュートの気持ちよさだけで十分なんだよ」。

大好きなサーフィンの話をいきい





「カリフォルニアに比べたら波なんて全然ない。
でも、鎌倉が恋しかったんだよね」

きと語るジョージさん。それにしても、サンフランシスコに比べて圧倒的に波のない日本にわざわざ戻ってきたのはなぜなのだろうか。

「鎌倉が恋しかったんだよね。逆に鎌倉を知らなかったら、日本には帰ってこなかったと思う。俺みたいに国籍がアメリカで日本に住んで、アメリカンスクール出身っていうヤツは、本当の自分の田舎っていうのがないんだよね。でも俺にとっては、それが鎌倉なんだと思う。鎌倉で生まれたってことは、すごく大きなプライドでもあるし。国籍はアメリカなんだけど、鎌倉人なんだよね。実際、鎌倉を出てアメリカに渡ったときは、アメリカ人になる修行をしに行く、みたいな感覚だったし。鎌倉に戻ってきた今、やっぱり居心地のよさを感じるよ。自分が自分らしく自由でいられるというか。土日でも忙しく動いてる東京と違ってちゃんとオフがあるし、自然が豊かなのもいいよね。前に息子を東京に連れて行ったら、おもしろいこと言ったの。東京って木はたくさんあるけど森がないね、って。鎌倉は山も海もあるし、800年の歴史もある。それでいて、東京までの距離感もちょうどいい。東京で仕事した後、ちよっと賢沢してグリーン車に乗って、シート倒してビール飲みながら帰ってこれるなんて最高でしょ。車で帰ってくる時も、湘南に近づくとだんだん

ん緑が多くなってきて、朝比奈のここから山になって……。そんなマジックでしょ。車でも電車でも移動の途中で気持ちが切り替わって、帰ってくるとなんだか安心するんだよね。本当に、鎌倉のよさを語り出したらきりがなしよ(笑)」。

昔から変わらない魅力を保ちながらも、以前より移住者や観光客、新しい店などが増えて着実に進化している鎌倉。そんな変化に対して、ジョージさんはどのように感じているのだろうか。

「鎌倉に住んでいる人は、昔からみんな地元愛が強い人が多いよね。新しく移住してくる人も、好きだから移り住んできたという人が多くてうれしいよ。この頃はおいしいレストランも増えて、それもいいことだよ。昔は鎌倉って外で食べる場所がほとんどなくて、外食するのは文化人くらいだったからね。今はいろんなレストランやお店ができたし、70年代にアメリカで流行っていたハイブレイとかオリジナルコーヒーとか無農薬の野菜とか、ナチュラルなものを今、鎌倉のネオヒッピーたちが盛り上げてる。自分がいた時代のアメリカがまた日本で再現されていて、それもうれしいんだよね。けどどいまだに鎌倉とか湘南って、誰かの家にご飯食へに行ったりする機会も多いよね。そういう家族ぐるみの付き合いとか、夫婦単位で動くのが



GEORGE COCKLE INTERVIEW

多いっていうのも湘南ならではのじゃないかな。そして、そういうところがアメリカっぽかったりするよね。俺も今の番組が始まる前は、毎週日曜の夕方にワイフと一緒にモンクス行って、夕陽を見ながらワインを飲むのが定番だった。最近はやきとり秀吉の外に座ってビール飲むのが定番だけど(笑)。そうすると知り合いがいっぱい来て、話しながら一杯やって、ってなる。そういう気取らなくてフレンドリーな鎌倉が好きだね。今は鎌倉ケーブルテレビのキヤスターもやってるから、そこで飲んでるとおばあちゃんたちが「ジョーさん、見えますよ」って声をかけてくれる。そういうのも楽しいよ。あとは、仕事終わりに小坪の酒屋でビール買って、海で夕陽見ながら飲むのも好き。柿ピーかじりながら(笑)。そっちのほうが高級レストランで食事するよりずっと贅沢だと思うよ」。

これからの鎌倉に願うこと

鎌倉という土地と、そこに住む人を愛してやまないジョージさん。最後に今後、鎌倉はどんな場所になってほしいかを聞いた。

「鎌倉は、もっと古いものを大事に守っていくべきだと思う。昔の洋館なんてほとんどなくなってきたから。それは鎌倉だけじゃないけど、でも特に鎌倉はインターナショナル

な街なんだし、洋館っていうのは鎌倉にとって特別な建物だから残してほしいよね。前に鳩サブレの会社の社長がおもしろいこと言ってたんだ。鳩は日本でサブレは外国、それが鎌倉なんだ、って。だから俺みたいな人も、鎌倉人として住める。鎌倉はもっとそういうことを意識して国際的になってほしいね。お寺や神社だけじゃなく、街の景観ももっと大切にしましょ。サンフランシスコでは、家は修理してもいいけど道に面しているところは手を加えちゃいけないっていう決まりがある。だから、あれだけ統一感のある街並みになってるんだよ。それから、トイレやゴミ箱を増やして人に優しい街にしてほしいね。毎年、夏の鎌倉を見て疑問に思うのが、あれだけたくさんの人が来てるのに駅から海までの間に公衆トイレが一個もないってこと。海岸にゴミが山になってるのも問題だね。俺、アメリカ人じゃなかったら市長に立候補して改革したいくらい(笑)」。

よりよくなってほしいと願うのは、鎌倉を誰よりも好きだからこそ。由比ガ浜通りには、ジョージさんが書いたとらう「To our Children's Children's Children、ようめっさー」が飾られている。未来の子どもたちのために、よき鎌倉を。それは、湘南に住む私たち全員に共通した願いでもある。

